しんあい

社会福祉法人　信愛会

第21号
（第15号までは『裕生園だより』）
発行日：平成20年2月22日
・特別養護老人ホーム裕生園
・ケアハウス　シャトル
・グループホーム　たちばな
〒880-2221 宮崎県宮崎市高岡町内山2407-3
TEL.0985-82-0196(代)
ホームページ http://www.sin-ai.or.jp
メールアドレス yuseien@qtnet.ne.jp

平成19年11月16日、東国原英夫宮崎県知事が辰元グループの視察に来られました。
109歳の植村コトさん（右）、100歳の鈴木サエさんと並んで。（裕生園ホールにて）

ごあいさつ

裕生園園長　辰元圭子

昨年、裕生園創立三十周年記念式典を終え、今年再出発の年にあたり、紙上をお借りして感謝申し上げます。手探りの状態から始め、行政・地域・利用者・家族に育てられ今日を迎えられたと思います。

社会福祉法人も運営だけでなく、独自に経営に力を入れなければならなくなり、当法人も地域に密着した、お年寄りの生活に必要なきめ細かな事業を手がけ、採算に合わない事業もやらざるを得ません。介護保険給付の改正があるたびに減額され、また、利用者も高負担になっていき、施設の経営が厳しさを増します。

利用者への質の高いサービスを提供するには配置基準以上の職員が必要です。近年、若者の介護職離れか、学生さんが減少しています。施設経営者として「職員が働きがいを持って働ける施設」と「利用者が安心して利用できる施設づくり」に努力する事だと思います。

先日、東国原知事がグループの全施設を訪問して下さり、利用者や職員は大変な喜びようで、認知症の利用者が敬礼をしたり、寝たっきりの利用者が「こんな格好ですみません」とあいさつをしたりと、その潜在能力を発揮したことに私達職員も驚きました。知事がお年寄りに目を向けて下さったことや、先日県会議員の方々が十数名医療法人を視察され、老人問題の現状報告に耳を傾け、関心を寄せて下さった事に感謝します。

今後『老人にやさしい街、宮崎』として自分達が何ができるか、福祉の原点に立ち返りたいと思います。

東国原英夫知事　来園!!

平成19年11月16日（金）

平成十九年十一月十六日、就任一年目で全国的な注目を集める〝時の人〟東国原英夫宮崎県知事が辰元グループの視察に来られました。同一敷地内に高齢者医療・保健・福祉の諸施設がそろう複合施設辰元グループを、四十分という短い時間でしたが、精力的に回られた東国原知事。どこへ行っても大変な人気。利用者も職員も、知事と一緒に写真におさまろうとしてごった返しました。みんなに元気をくださった知事、大変お忙しい中、本当にありがとうございました。

裕生園で大勢の利用者に迎えられてあいさつをする知事

ケアハウスシャトルの入居者の皆さんと。どこへ行っても人気の知事

グループホームたちばなにも足を運んでくださいました。

辰元圭子園長から説明を受ける東国原知事

裕生園創立三十周年記念式典　挙行さる

平成19年6月14日(木)

津村重光宮崎市長をはじめたくさんのご来賓よりご祝辞をいただきました。

辰元グループ勤続20年以上の職員の表彰

裕生園に隣接する"ナナホール"にお集まりいただいた100名を超す来賓の方々

裕生園創立30周年を記念して発行された記念誌『利用者と共に歩む』

裕生園家族会代表池田氏から辰元園長へ記念品目録の贈呈

裕生園利用者代表、入船スエ氏の感謝の言葉

平成十九年六月十四日、あいにくの小雨の中、裕生園に隣接するナナホールで、裕生園創立三十周年記念式典が、津村重光宮崎市長をはじめ百名を超えるご来賓の方々をお迎えして、盛大に執り行われました。ボランティア団体の表彰、永年勤続職員の表彰、ご来賓の方々のお祝いの言葉、利用者代表のあいさつ、家族会代表による記念品目録の贈呈といった式典のあとは、スピリットノイズの皆さんによる音楽演奏、ゴマハタの解体ショー、職員による創作ダンスの披露と余興が続き、最後は信愛会理事の中原和夫氏による万歳三唱で全日程が終了しました。

裕生園創立30周年記念式典　特集

裕生園創立三十周年記念式典の中で、入船スエ氏が利用者代表として感謝の言葉を述べられました。ご自身で文章を練り、式典当日に向けて朗読の練習も行いました。本番当日では、はっきりとしたよく通る声であいさつ文を読み上げられ、参加者の中に際立った印象を残しました。入船さんが最後に「九十三歳」と力強く締めくくった時、場内から感嘆の声が上がりました。入船スエさん、本当にありがとうございました。

裕生園入居者代表として感謝の言葉を述べた入船スエ氏

はっきりと、よく通る声で文章を読み上げられた入船氏

入船（イリフネ）スエ氏による感謝の言葉

只今ご紹介いただきました裕生園利用者の入船スエと申します。本日は理事長先生、園長先生、ならびに職員の皆様、御来席の皆様、誠におめでとうございます。裕生園の三十周年記念式典に際しまして、利用者代表として感謝の気持ちを申し上げたいと思います。

家で一人暮らしでしたが、ある日突然悪くなり、身うごきが取れず、どうにもならず、平成十六年六月十六日裕生園へ入園させて頂きました。この上もない喜びで、しばらく泣き続けました。両手両足のひどいシビレ、頭痛、ぜんそく、と重い荷物をひきずり乍ら、手厚いお世話を受けて、今日に至っています。

今では「車イス」にたより乍ら、毎日の生活。寮母の皆様のていねいな事。一言もいやな事を言わない、まごころからの愛につつまれての毎日の生活。御医者様はもとより看護婦さん、毎日体調に気くばり、炊事場にお勤めの方、長生きさせて頂いています。皆様に毎日笑顔につつまれ乍ら、感謝感謝の毎日の生活、有難うございます。

妹の入船三代子は、裕生園の看護婦として長年お世話になっていましたが、実母が弱くなり看病の為、おひまを頂きました。

又、私の主人の入船敏男、これも又裕生園と御縁が深く、長い間御手伝いをし、前の田んぼなどお世話させてもらい乍ら、今日と言う日を迎えました。入船敏男が生存していれば「どんなにか大喜びしてくれただろう」と、胸がいっぱいになりました。私は思い出のつまったウラ山をながめ乍ら、毎日の生活のささえに生きています。

西暦二〇〇七年、長い歴史と共に特別養護老人ホーム裕生園は創立三十周年を迎え、記念すべき日となりました。感謝の気持ちは私だけではなく、他の利用者とその家族も同じだと確信致しております。これからも、明治大正昭和と共に生きてこられた方々がたくさんおられると思いますが、其の方々も利用が出来る事を切に切にお願い致します。多くのみなさまの声が聞こえて来る様です。

裕生園が大きくふくらみ、先頭に立ち上がり、お待ちかねの皆様方を残らず特別養護老人ホームへお迎えして下さる様、切に切に「キボーイタシマス」これからも高齢者のために五十年百年となります様お願い致します。

平成十九年六月十四日

裕生園利用者代表　入船スエ　九十三歳

裕生園創立30周年記念式典　特集

永年勤続職員代表として辰元園長から記念品を受ける宮田さん

ケアハウスシャトル職員
宮田トク子

謝辞

本日、裕生園創立三十周年記念式典において永年勤続表彰を受けました二十六名を代表しまして、一言お礼を申し上げます。

私は、裕生園開園翌年の昭和五十三年四月に入職しました。当時はまだ資格制度もございませんでしたが、社会福祉主事、痴呆研など諸々の勉強をさせて頂く中、当時の定年五十歳を目前にして有資格者制度が出来ました。定年を間近に控えておりましたが、国家試験を受験させて下さる事になり、幸い介護福祉士の資格を取得する事が出来ました。一旦五十歳で定年退職しましたが、定年期間の延長とともに再雇用して頂きまして、現在六十七歳の今日まで勤めさせて頂いております。

永年、福祉の仕事に携わって参りまして、沢山の事を学ばせて頂き私を育てて下さいました理事長、園長のご厚情に深く感謝申し上げます。

これからも健康で、気力、体力の許す限り、福祉の増進、辰元グループのますますの発展の為に、もとより微力ではございますが、これからも頑張って参りたいと存じます。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

本日は本当にありがとうございました。

社会福祉法人信愛会職員
永年勤続表彰者代表　宮田トク子

式典の中で、永年勤続職員の表彰もありました。辰元グループは人事交流も盛んに行われるため、社会福祉法人、医療法人という法人のワクを越えて永年勤続者を表彰しました。勤続二十年以上の職員二十六名が壇上に上がり、現在ケアハウスシャトルの職員である宮田トク子さんが代表として謝辞を述べました。

また、裕生園家族会から記念品目録の贈呈があり、後日、右の写真のようなリハビリ・レクレーション用品一式を購入させていただきました。さっそく、利用者のリハビリ・レクレーションの時間に活用しています。ありがとうございました。

裕生園家族会から寄贈されたリハビリ・レクレーション用品一式

明るく楽しい園生活

運動会

園内行事

夏祭り

外出・遠足

ケアハウス●シャトル

平成十九年五月より、毎月一回、宮崎市立図書館の移動図書館"みどり号"がケアハウスシャトルを訪問してくれるようになりました。みどり号にはあらゆるジャンルの本がそろっており、利用される入居者はじっくりと本を選ばれています。なかにはみどり号が来ると同時にその中へ入り、何冊も借りていかれる方もいます。多い方で7冊ほど借りていかれますが、次回までにはきちんと読み終え、物足りない場合は、さらに自ら書店へ出向き購入されているようです。医療・健康分野の書物を借りられる方、「生きる」をテーマにした書物を借りられる方…　情報化社会の今、テレビやラジオ、パソコン等の比重が増して来ていますが、「本」という情報伝達物を長年利用された方々には、「本」は大変馴染み深いものであり、心を癒してくれるものなのでしょう。本を大事そうに扱われたり、本を手に取った時の皆さんの笑顔でそれがわかります。入居者の皆さんにとってなくてはならない存在になりつつあるこのみどり号の訪問が、今後も継続してくれることを願っております。

ケアハウスシャトルの玄関前に到着した移動図書館"みどり号"

移動図書館の内部の様子。皆さん、真剣な眼差しですね

お気に入りの本が見つかり、笑顔がこぼれます

グループホームたちばな　管理者　長友 美紀

初夏にかわいい命の誕生、そして初秋にグループホームデビューとなり、また家族が増えました。名前は「シロちゃん」。今、利用者の方々の温かい眼差しに包まれ愛情一杯。元気一杯。ナナ子おばあちゃんやミミお母さんと所狭しとやんちゃぶりを発揮しているミニチュアダックス犬である。利用者の方々にとってもアニマルセラピーとして、番犬のゴールデンレトリバー犬のポポとピー子ちゃん達と一役かっている存在であり、利用者の方々も今まで以上に活気づき、「ほら、あんたの顔を見ているよ！」「おなかがすいちょっとじゃないと？」「後ろに座っちょるよ。踏まんごつせんと」等々、職員同士への言葉掛けが賑やかに飛び交う毎日である。時にはホールのカウチに一緒に、読書もそこそこに、顔を並べて一人と一匹でお昼寝中の微笑ましい光景も見られる。

現代の荒んだ世の中と違って、グループホームは人と人、人と動物、人と植物等々、利用者の方々を取り巻く環境はほのぼのとした営みの空間である。ある冊子に「老人介護とは効率よく仕事するほど効率が悪くなる。相手の個性や生活習慣を尊重し老人の歩調に合わせて介護する。だからこそ老人が素敵に見えるだろう。あなたは自分の老いと付き合えるだろうか？老人が嫌いだという人は難しかろう。だってそれは自分の未来が嫌いだということだから」この言葉、噛みしめたいという記事である。正に私達介護者にとって日々念頭に置きつつケアに心掛けていくべきことである。今年も笑顔と感動を利用者の方々に沢山提供できるよう、職員一同真心をもってケアに励んでいきたいと思います。

7月 家族とのふれあいデー
家族と一緒に買い物や食事と楽しいひとときを過ごしました

10月 カラオケ大会
調子を合わせ声高らかに東京音頭を歌いました

11月 東国原知事来園
親しみを感じ笑顔と元気を沢山もらいました

12月 家族の健康を願い
心を込めて年賀状を書きました

12月 もちつき
昔とった杵柄あっという間にまるめて完成　さすがです！

新しく仲間入りした"シロちゃん"

利用者の視点 寄り添うケアをめざして

グループホームたちばな
黒岩　睦子

平成一六年四月にグループホーム「たちばな」3号館に異動になり、四年が経とうとしています。最初はとまどう事がたくさんありましたが、利用者や家族、各号館の職員に支えられ、今日があると心から感謝しています。認知症になってたとえ知能が破壊されても情緒は破壊されない。だから人間性は変わらないと新聞に書いてありました。グループホームでは宮崎市が運営する認知症ケアマネジメント推進事業（センター方式）を取り入れ、取り組んでいます。十七年度は三号館がケース担当になり一年間取り組みました。家族の協力もあり、帰宅欲求の強い利用者が穏やかに生活されるようになりました。十八年度は一号館がケース担当になり、十六シートをうめながら職員が共有し同じ視点でケアを実施し、寄り添う事で拒否が多かった利用者より「ありがとう」と言う感謝の言葉が聞かれるようになり大きな成果がありました。十九年度は二号館が取り組んでいます。利用者本位のケアの実現に向けて職員が一丸となって利用者の視点に立ったケアに日々取り組み、家族の協力もあり面会も多くなり喜んでいます。これからもセンター方式を取り入れ、利用者の能力に応じて自分らしく暮らし続けられるよう安心、安全に生活出来るよう思いやり、やさしさを持って日々のケアを努力し、支えていきたいと思っています。今度ともどうぞ宜しくお願い致します。

介護を受ける側が求めているもの

たかおか居宅介護支援事業所
神田　慎一

私は在宅のケアマネジャーとして、たかおか居宅介護支援事業所に勤務しています。介護保険制度も、八年目となり、私も今年で六年目になりました。たかおか居宅介護支援事業所は裕生園の一画に事務所を置き、ちょうどクジャク小屋の前に位置します。私の仕事は要介護者（利用者）の依頼を受けて、その人の健康状態や家族状況、希望などを把握し、最も適切なサービスを組み合わせた計画（ケアプラン）を作成し、サービスの調整を行い、そのサービスが適切に受けられるように管理していくことで利用者が住み慣れた自宅で安心、快適に過ごすことができるように支援していくことです。

現在、私が担当させていただく利用者の方々の中には、介護保険サービスを受けながら一人暮らしをされている方もおります。私がいつも仕事をしている中で大切にしていることがあります、それは利用者に接する態度として、お世話をさせていただく、介護をさせていただくという姿勢で臨んでいることです。そして常に利用者側の立場に立った視線で対応しています。そうすることでお互いの信頼関係も築くことができるように思います。そして、その信頼関係の中から、利用者本人、または介護をされているご家族が、日々の生活の中で何を求め、介護する側に何を求めているかが分かってくるのではないでしょうか。これからますます独居老人、老々介護が増えてくる中、行政だけではなく地域で支えていくということが言われています。私もその一員として在宅で生活をされている、また介護をされているご家族の「思い」を大切にして、微力ながらお手伝いをさせていただきたいと思います。

ありがとうの重み

裕生園訪問介護ステーション
緒方　美香

私は介護ヘルパーの仕事を初めて六年が経ち、こちらの裕生園訪問介護ステーションでの勤務は四年が経ちました。

以前の職場での登録ヘルパーから常勤で勤めるようになりヘルパー業務に加え初めての事務、十名ほどのヘルパーさん方の取りまとめ、六十名ほどのさまざまな利用者と、沢山の初めてがあり四苦八苦していた頃が懐かしく、それが乗り越えられたのも色々な方々の支えがあったからだと感謝しています。

在宅でのヘルパー業務とは個々のお宅へ訪問し、計画された内容を計画された時間の中で行っていく仕事です。そのお宅一件一件には、利用者さんや御家族の大切な生活空間があり生活模様があります。そんな中で仕事をさせて頂く私達には何よりも利用者さんとの信頼関係が重要で初めの大切な仕事だと思っています。いい関係の下、仕事が行える為にもコミュニケーションの時間を大切にし、利用者さんへ安心が提供できるように日々努力を心がけていきたいと思います。

今後も介護保険制度の移り変わりが色々な角度から行われると思いますが、制度は変わっても、利用者さんの気持ちを大切に思う介護を心がけ、そして「ありがとう」の言葉の重みを忘れる事なく元気一杯、頑張っていきます。

辰元グループ 関連施設全体図

●宮崎市高岡町内山、飯田

しんあい歌壇

毎月一回、ケアハウスシャトルで行われている短歌会で発表された短歌の中から、いくつかをご紹介します。作者は、シャトル、裕生園及び信愛園の入居者の方々です。（氏名五十音順）

・身のいたさ心いたさになやまされ
　ことしの秋をたえてきました
　岩切　志知

・日本は安部政権にたのみます
　未解決なる問題多し
　岩切　志知

・大家族の農家へ嫁ぎ大がめに
　味噌つき節の手となりにけり
　緒方　信子

・朝夕に八十路の顔に化粧水
　つけては耳を引き気を入れる
　緒方　信子

・鉄屑は光りし過去を持ちおれど
　錆つきしまま老いゆく吾は
　川島　俊彌

・健やかに過させ給え後五年
　願いて掲ぐ元旦の日暦
　川島　俊彌

・有明けの月を仰ぎて偲ぶかな
　言葉交わさず別れし君を
　下田　欣吾

・家出して尋ね来たりし教え子も
　今は三児の母となりけり
　下田　欣吾

・満開の梅そよ風に香をのせて
　記念写真の列に舞い来る
　花田　暢子

・耳に痛きこともさらりと聞き流し
　浮世渡るも年の功かな
　花田　暢子

・ゼラニュームベランダよりに顔出しぬ
　お風呂帰りの憩いのひととき
　堀添　ヒサ子

・三才の命といわれ九十の
　誕生会に菓子をふるまう
　松田　花寿

・中国は赤い夕日と緑の平野
　我を迎える真心の母
　松田　花寿

・さつそうと髪なびかせて行く自転車の
　乙女を美しと見惚れ佇む
　松本　マサ

・ありがとう命をかけて産んだ子に
　今みまもられ涙する我
　松本　マサ

・雛段に夫（ツマ）と並びてすまし顔
　あけがたの夢に古希のわれ笑む
　森田　琢恵

・「引き落し」勧められるも行員に
　街に来ること楽しと答う
　森田　琢恵

『ひこばえ』第37号～第48号の中から
『しんあい』編集部が選びました。

●●編集後記●●

平成十九年は辰元グループにとって二つの大きな出来事があった年として記憶されるでしょう。一つは、六月に行われた裕生園創立三十周年記念式典。もう一つは、十一月の東国原英夫知事の来園です。知事は宮崎県のみならず、全国的に旋風を巻き起こし、"どげんかせんといかん"が平成十九年の流行語大賞に選ばれました。そんな超多忙な知事の来園だったので、短い時間でしたが、利用者及び職員に強烈な印象を残し、元気を与えてくださいました。ありがとうございました。高齢者医療・福祉の現場を直接見られた知事が今後の施策に活かしてくださることを期待いたします。